

## 二 特集二

# 特別支援教育関連分野におけるICF又はICF-CY活用に関する検討

## —連携におけるICF又はICF-CYの活用のために—

徳 永 亜希雄\*・田 中 浩 二\*\*・堺 裕\*\*\*

春 名 由一郎\*\*\*\*・佐 藤 久 夫\*\*\*\*\*

(\*教育支援部) (\*\*東京成徳短期大学) (\*\*\*)帝京大学)

(\*\*\*\*独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構 障害者職業総合センター) (\*\*\*\*\*日本社会事業大学)

**要旨：**本研究では、特別支援教育推進にかかる関連分野である医療、福祉、保健、労働各分野との連携にICF又はICF-CYを活用する上での知見を得るため、関連分野におけるICF又はICF-CY活用の特徴について検討することを目的とした。論文検索データベースでのキーワード検索によって抽出された文献及び国立特別支援教育総合研究所におけるこれまでの関連研究での関連成果報告等合計112件を対象として、これまでの調査等を踏まえて設定した観点で分析した。その結果、ICFとICF-CYに共通した概念の活用等が各分野に共通している一方、分類項目や評価点の活用等、分野による違いが推測された。特別支援教育推進における連携のためにICF又はICF-CYを用いる際は、概念を用いたケースの理解の有効性ととも、分野による活用の特徴を踏まえる必要性が示された。

**見出し語：**特別支援教育、関連分野、ICF、ICF-CY、活用

## I はじめに

2001年のWHO（世界保健機関）総会において採択されたICF（International Classification of Functioning, Disability and Health, 国際生活機能分類）は、その目的の一つに「健康状況と健康関連状況とを表現するための共通言語を確立し、それによって、障害のある人々を含む、保健医療従事者、研究者、政策立案者、一般市民などのさまざまな利用者間のコミュニケーションを改善すること」を挙げている（世界保健機関、2002）。また、ICFの派生分類として分類項目の拡充等が図られ、2007年に公表されたICF-CY（Children and Youth Version, 同児童版）においても、その目的として「乳児期、少年期に現れた諸問題、すなわち心身機能・構造上

の問題、活動制限、参加制約、また児童にとって重要な環境因子を記録するための概念的枠組みと共通言語・共通用語を提供する」と述べている（世界保健機関、2008）。

本邦においては、ICFが採択された翌年の2002年に策定された障害者基本計画の中で障害の理解や適切な施策推進の観点からICFの活用方策を検討する旨が記載され、以降、様々な分野で活用が図られてきた。2006年には社会保障審議会統計分科会の下部組織として生活機能分類専門委員会が置かれ、様々な分野でのICFを巡る諸課題について検討が行われてきた。また、同委員会を所管する厚生労働省主催によって2010年に開催されたシンポジウムでは、「生活機能分類の活用に向けて—共通言語としてのICFの教育・普及を目指して—」とのテーマのもと、関連分野をつなぐICFの活用の方向性が検討された

(厚生統計協会, 2011)。

特別支援教育分野の動きとしては、例えば、国立特別支援教育総合研究所（以下「本研究所」という）では、ICF活用の可能性について検討した冊子を発行し（国立特殊教育総合研究所・世界保健機関, 2005）、その後も研究課題「ICF児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究（2006～2007年度）」、「特別支援教育におけるICF-CYの活用に関する実際研究（2008～2009年度）」、「特別支援教育におけるICF-CYの活用に関する研究－活用のための方法試案の実証と普及を中心に（2010～2011年度）」を立て、活用のあり方や方法等の検討に取り組んだ。その一環として実施した特別支援学校を対象としたICF及びICF-CYの活用状況等の悉皆調査では、回答校全体の約21%において何らかの形でICF又はICF-CYが活用されていることが明らかになった（松村他, 2009）。また、2009年及び2010年には、日本特殊教育学会においてICFの活用をテーマとした準備委員会シンポジウムが開催されており、関係者間における関心の高まりも窺える。

特別支援学校の学習指導要領等の解説においては、ICFについて2カ所言及されている。まず、自立活動編では、「障害による学習上又は生活上の困難」のとらえ方と関連づけて述べられている（文部科学省, 2009a）。ただし、「障害による学習上又は生活上の困難」は、学校教育法に示された特別支援教育の目的の中に示されていることから、このことは自立活動のみに限定するものではなく、特別支援学校全体について述べているものといつてよい。次に、総則等編では、作成が義務づけられた個別の教育支援計画における関係者間での実態把握と共通理解の参考とするものとして述べられている（文部科学省, 2009b）。前述の調査においても、特別支援学校においてICF又はICF-CYの活用でもっとも多い活用場目は個別の教育支援計画であることが報告されている（松村他, 2009）。

特別支援教育の推進にあたっては、各学校及び各教育委員会等が必要に応じて医療、福祉、保健、労働等の業務を行う関係機関との連携を図る旨のことが「特別支援教育の推進について（通知）」（19文科初第125号）において述べられている。同様に、特

別支援学校の学習指導要領等の総則においても、家庭や地域、医療、福祉、保健、労働等の関係機関との連携の必要性和そのために個別の教育支援計画を作成する旨のことが述べられている（文部科学省, 2007, 2009c）。

以上を整理すると、特別支援教育を推進するには、教育のみならず関連分野の機関や職種等との連携が必要であり、またそのための手だての一つとしてICF又はICF-CYの活用が考えられる。これまで本研究所においては、特別支援教育の活用状況等については、前述の調査（松村他, 2009）等を通して検討してきたが、関連分野の活用の検討は「ICF児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究（2008）」以降、十分には行っていない。各分野のICF及びICF-CYの活用の検討としては、前述のシンポジウムの他、雑誌の特集（日本発達障害学会, 2007；医学書院）や紀国谷（2007）による指摘等があるが、関連分野との連携のもとでの特別支援教育の推進を念頭において考察したものは見当たらない。

そこで、本研究においては特別支援学校の学習指導要領等において、連携が必要な関連分野として例示された医療、福祉、保健、労働各分野におけるICF又はICF-CY活用の特徴について文献での記述内容を手がかりに把握し、特別支援学校での活用状況との比較による検討を行うことにした。

## Ⅱ 目的と方法

### 1. 目的

医療、福祉、保健、労働各分野におけるICF又はICF-CY活用に関する文献の記述内容について、それらの特徴について検討し、併せて特別支援学校での活用状況と比較することをとおして、関連各分野との連携にICF又はICF-CYを活用する際の知見を得ることを目的とした。

### 2. 方法

#### （1）特別支援学校におけるICF及びICF-CYの活用状況

関連分野の活用に関する記述内容との比較のた

表1 「活用の観点」に関する選択肢と対応する分析の観点

| 選択肢                                                                        | 対応する観点                      |
|----------------------------------------------------------------------------|-----------------------------|
| ア) 心身機能・身体構造, 活動, 参加という生活の機能に加え, 環境因子や個人因子等を含めて多面的・総合的に人を理解するという考え方を活用している | ①「概念」                       |
| イ) 「健康状態」を重視する視点を活用している                                                    | ②「構成要素」                     |
| ウ) 「心身機能・身体構造」を重視する視点を活用している                                               |                             |
| エ) 「活動」を重視する視点を活用している                                                      |                             |
| オ) 「参加」を重視する視点を活用している                                                      |                             |
| カ) 「環境因子」を重視する視点を活用している                                                    |                             |
| キ) 「個人因子」を重視する視点を活用している                                                    |                             |
| ク) ICFの概念図を模した図(以下, 「ICF関連図」)を用いて幼児児童生徒の情報を整理する方法を活用している                   | ③「図式又は書式」                   |
| ケ) 「ICF関連図」等で幼児児童生徒に関する複数の情報を関連づける方法を活用している                                |                             |
| コ) 「ICF関連図」作成作業を共有する方法を活用している                                              |                             |
| サ) 作成された「ICF関連図」を共有する方法を活用している                                             |                             |
| シ) 「ICFチェックリスト(独自に創意工夫したものを含む)」等によりICF又はICF-CYの分類項目を活用している                 | ④「第2レベルまで」、⑤「詳細分類」          |
| ス) チェックリストではなく, ICF又はICF-CYの分類項目そのものを活用している                                | ④「第2レベルまで」、⑤「詳細分類」、⑥「コアセット」 |
| セ) ICF又はICF-CYの分類項目の評価点を活用している                                             | ⑦「評価点」                      |
| ソ) その他                                                                     |                             |

め, 前述の調査(松村他, 2009)において明らかになった特別支援学校における活用状況について, 本研究に関連した内容として, 特に活用の観点に焦点を当て, 整理した。

## (2) 関連分野の検討結果

### 1) 対象

以下の手続きで選定した医療, 福祉, 保健, 労働各分野におけるICF又はICF-CY活用に関する文献を対象とした。まず, 文献検索データベースCinii(論文情報ナビゲータ)を用いて, キーワード検索を行った。検索日は2012年7月20日である。各分野のキーワードは, 医療分野については「ICF」と「医療」及び「ICF」と「リハ」, 福祉分野については「ICF」と「福祉」, 保健分野については「ICF」と「保健」, 労働分野については「ICF」と「雇用」, 及び「ICF」と「就労」とした。抽出された文献について, ①記

述内容がその本研究の趣旨と異なるものや重複するものを除き, ②該当領域以外について記述されているものは, 適切と思われる分野の資料として採用した。ただし, 要旨のみの記載のような全体の記述が判断できない学会発表資料等は除き, ③複数の分野について記述されているものはそれぞれの分野の資料として判断する, という作業を行った。次に, 著者が各分野のICF及びICF-CY活用についての検討結果をまとめた文献等も適宜取り入れた。

### 2) 分析

同調査の中で活用の観点について尋ねた際に用いた選択肢(表1)を参考にして次の①から⑦の観点を設定した。

さらに, その他の文献等(大川, 2006; 徳永, 2007)を参考にして, ⑧実行状況と能力の活用, ⑨連携のための共通言語としての活用及び⑩分類項目を調査等に直接用いた統計ツールとしての活用とい



う3つの観点を加え、合計10個の観点を設定した。

①概念の活用

設問ア)に対応したもの。以下「概念」と略記。

②各構成要素の活用

設問イ)～キ)に対応したもの。以下「構成要素」と略記。

③概念に基づき、構成要素を用いて図式化或いは書式化して情報を整理する形態での活用

設問ク)～サ)に対応したもの。以下「図式又は書式」と略記。

④分類項目(第1又は第2レベル)の活用

設問シ)及びス)に対応したもの。以下「第2レベルまで」と略記。

⑤分類項目(詳細分類)の活用

設問シ)及びス)に対応したもの。詳細分類について述べる場合は、必ず④の第2レベルまでの分類項目に述べることになるが、ここでは、⑤のみに整理した。以下「詳細分類」と略記。

⑥特定の分類項目のセット(コアセット)の活用

設問ス)に対応したもの。以下「コアセット」と略記。

⑦評価点の活用

設問セ)に対応したもの。以下「評価点」と略記。

⑧実行状況と能力の活用

他の文献を参考にした。以下「実行状況と能力」と略記。

⑨連携のための共通言語としての活用

他の文献を参考にした。ICF又はICF-CYに関連づけず連携等について言及したものは含まない。以下「共通言語」と略記。

⑩分類項目を調査等に直接用いた統計ツールとしての活用

他の文献を参考にした。調査の分析にのみ用いたものは含まない。以下「統計」と略記。

これらの10個の観点をを用いて、各分野の文献の記述内容について、ICF又はICF-CYに関連させた上で言及しているものについて整理した。一つの文献において複数の該当の観点がある場合は、言及の仕方によらず、全ての観点到印をつけた。次に観点毎

の記述の割合について当該分野全体の文献数を分母に算出し、当該分野の記述状況を把握した。

最後に、全4分野の観点毎の割合と、特別支援学校の活用状況とを比較しながら各分野の特徴について、考察を行った。

### Ⅲ 結果

#### 1. 特別支援学校におけるICF及びICF-CYの活用状況

ここでは、特別支援学校におけるICF及びICF-CYについての認知度及びICF又はICF-CY活用状況とその成果と課題等について把握することを目的に行った調査(松村他、2009)結果から、特別支援学校におけるICF又はICF-CYの活用状況を、特に活用の観点を中心に述べる。調査の概要は次のとおりである。

調査内容のうち、各校の基本情報以外のICF及びICF-CYに関する内容は、①ICF及びICF-CYの認知度、②ICF又はICF-CYの活用状況、③ICF又はICF-CYの活用後の成果及び活用上の課題についてであった。調査対象は本邦の全特別支援学校1,134校(分校・分教室を含む)とした。調査方法としては、2009年7月に調査票を各校に送付し、8月を目処として郵便又は電子メールへのファイル添付での返送を求めた。調査基準日は、同年5月31日とした。

回答総数は809校(回収率71.3%)であった。そのうち、ICF又はICF-CYの活用があるとの回答があったのは169校(回答校全体の20.9%)であった。ICF又はICF-CYの活用状況について把握するため、1)活用の場面、2)活用の目的、3)活用の観点毎に、それまでに収集した実践報告等のレビューに基づいて選択肢を設けて尋ねた(複数回答可)。それぞれの結果は次のとおりである。なお、( )内の百分率は、活用があると回答した169校における割合である。

活用の場面に関する結果について表2に示した。15個の選択肢のうち、「個別の教育支援計画(個別の移行支援計画を含む)において」98校(58.0%)、「個別の指導計画において」86校(50.9%)、「授業の計画段階において」51校(30.2%)という順に回答

表2 「活用の場面」に関する回答と回答の割合（頻度順）

| 順位 | 選択肢                              | 回答校数 | 活用のある学校（169校）の中での割合 |
|----|----------------------------------|------|---------------------|
| 1  | 個別の教育支援計画（個別の移行支援計画を含む）において      | 98   | 58.0%               |
| 2  | 個別の指導計画において                      | 86   | 50.9%               |
| 3  | 授業の計画段階において                      | 51   | 30.2%               |
| 4  | 自立活動の指導において                      | 49   | 29.0%               |
| 5  | 進路指導において                         | 36   | 21.3%               |
| 6  | 事例検討会において                        | 32   | 18.9%               |
| 6  | 話し合いや面談において                      | 32   | 18.9%               |
| 7  | 個別の教育支援計画や個別の指導計画、授業計画等の間の整理において | 30   | 17.8%               |
| 8  | センター的機能による地域支援において               | 27   | 16.0%               |
| 9  | 交流及び共同学習において                     | 18   | 10.7%               |
| 10 | 学校での指導内容表等の検討において                | 17   | 10.1%               |
| 11 | 授業の振り返り段階において                    | 15   | 8.9%                |
| 12 | 寄宿舎において                          | 12   | 7.1%                |
| 13 | その他                              | 7    | 4.1%                |
| 14 | 統計的な情報の整理において                    | 2    | 1.2%                |

が多かった。

活用の目的に関する結果について表3に示した。14個の選択肢のうち、「幼児児童生徒の実態把握のために」95校（56.2%）、「幼児児童生徒への指導・支援内容や方法の検討のために」87校（51.5%）、「幼児児童生徒の実態から課題の抽出を行うために」72校（42.6%）という順に回答が多かった。

活用の観点に関する結果について表4に示した。活用の観点については本研究の分析の観点の参考にしているため、少し詳しく述べる。ここでは、[その他]も含め、15個の選択肢を用いた。回答が多かった順に全て、回答校数も含めて挙げる。なお、冒頭のカタカナの記号は、表1にも記述した選択肢の番号である。

最も回答数が多かったのは、分析の観点「①概念の活用」に対応させた「ア）心身機能・身体構造、活動、参加という生活の機能に加え、環境因子や個人因子等を含めて多面的・総合的に人を理解するという考え方を活用している」101校（59.8%）であった。続けて、分析の観点「②各構成要素の活用」に

対応させた「オ）『参加』を重視する視点を活用している」58校（34.3%）、分析の観点「③概念に基づき、構成要素を用いて図式化或いは書式化して情報を整理する形態での活用」に対応させた「ク）ICFの概念図を模した図を用いて幼児児童生徒の情報を整理する方法を活用している」54校（32.0%）という順に続いている。

一方、ア）～セ）の中でもっとも回答数が少なかったのは、分析の観点「⑦評価点の活用」に対応させた「セ）ICF又はICF-CYの分類項目の評価点を活用している」1校（0.6%）であった。特別支援教育でのICF又はICF-CY活用に関する報告においても、評価点を活用した実践はわずかに見られる程度である（伊藤，2007；宮岸他，2009）。

## 2. 関連分野の検討結果

以下、医療、福祉、保健、労働各分野のICF又はICF-CYの活用に関する文献の検討結果について述べる。

表3 「活用の目的」に関する回答と回答の割合（頻度順）

| 順位 | 選択肢                       | 回答校数 | 活用のある学校（169校）の中での割合 |
|----|---------------------------|------|---------------------|
| 1  | 幼児児童生徒の実態把握のために           | 95   | 56.2%               |
| 2  | 幼児児童生徒への指導・支援内容や方法の検討のために | 87   | 51.5%               |
| 3  | 幼児児童生徒の目標設定のために           | 72   | 42.6%               |
| 4  | 幼児児童生徒の実態から課題の抽出を行うために    | 69   | 40.8%               |
| 5  | 教職員間の共通理解・連携のために          | 60   | 35.5%               |
| 6  | 保護者との共通理解・連携のために          | 47   | 27.8%               |
| 7  | 校外の関連機関・関係者等との共通理解・連携のために | 45   | 26.6%               |
| 8  | 幼児児童生徒の卒業後の姿をイメージするために    | 35   | 20.7%               |
| 9  | 幼児児童生徒への指導・支援後の評価のために     | 27   | 16.0%               |
| 10 | 幼児児童生徒の在学中の先の姿をイメージするために  | 14   | 8.3%                |
| 11 | 幼児児童生徒の相互理解のために           | 12   | 7.1%                |
| 12 | 幼児児童生徒に関する情報を資料として引き継ぐために | 9    | 5.3%                |
| 13 | 幼児児童生徒自身の自己理解のために         | 6    | 3.6%                |
| 14 | その他                       | 0    | 0%                  |

表4 「活用の観点」に関する回答と回答の割合（頻度順）

| 順位 | 選択肢                                                                     | 回答校数 | 活用のある学校（169校）の中での割合 |
|----|-------------------------------------------------------------------------|------|---------------------|
| 1  | ア) 心身機能・身体構造、活動、参加という生活の機能に加え、環境因子や個人因子等を含めて多面的・総合的に人を理解するという考え方を活用している | 101  | 59.8%               |
| 2  | オ)「参加」を重視する視点を活用している                                                    | 58   | 34.3%               |
| 3  | ク) ICFの概念図を模した図（以下、「ICF関連図」）を用いて幼児児童生徒の情報を整理する方法を活用している                 | 54   | 32.0%               |
| 4  | カ)「環境因子」を重視する視点を活用している                                                  | 45   | 26.6%               |
| 5  | エ)「活動」を重視する視点を活用している                                                    | 42   | 24.9%               |
| 6  | ケ)「ICF関連図」等で幼児児童生徒に関する複数の情報を関連づける方法を活用している                              | 34   | 20.1%               |
| 7  | シ)「ICFチェックリスト（独自に創意工夫したものを含む）」等によりICF又はICF-CYの分類項目を活用している               | 16   | 9.5%                |
| 8  | キ)「個人因子」を重視する視点を活用している                                                  | 11   | 6.5%                |
| 9  | ス) チェックリストではなく、ICF又はICF-CYの分類項目そのものを活用している                              | 11   | 6.5%                |
| 10 | サ) 作成された「ICF関連図」を共有する方法を活用している                                          | 10   | 5.9%                |
| 11 | ウ)「心身機能・身体構造」を重視する視点を活用している                                             | 9    | 5.3%                |
| 12 | コ)「ICF関連図」作成作業を共有する方法を活用している                                            | 8    | 4.7%                |
| 13 | イ)「健康状態」を重視する視点を活用している                                                  | 3    | 1.8%                |
| 14 | セ) ICF又はICF-CYの分類項目の評価点を活用している                                          | 1    | 0.6%                |
| 15 | ソ) その他                                                                  | 0    | 0%                  |

表5 医療分野におけるICF又はICF-CY活用に関する文献の記述

| 文献番号            | 記述の観点 |         |           |            |         |          |        |            |         |       |
|-----------------|-------|---------|-----------|------------|---------|----------|--------|------------|---------|-------|
|                 | ①「概念」 | ②「構成要素」 | ③「図式又は書式」 | ④「第2レベルまで」 | ⑤「詳細分類」 | ⑥「コアセット」 | ⑦「評価点」 | ⑧「実行状況と能力」 | ⑨「共通言語」 | ⑩「統計」 |
| 1               | ○     |         | ○         |            | ○       | ○        | ○      |            | ○       | ○     |
| 2               |       | ○       |           |            | ○       | ○        | ○      |            |         |       |
| 3               | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            | ○       |       |
| 4               | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 5               | ○     | ○       | ○         |            |         |          |        |            |         |       |
| 6               |       | ○       |           |            | ○       |          | ○      |            |         |       |
| 7               | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            | ○       |       |
| 8               | ○     | ○       |           |            |         |          |        | ○          | ○       |       |
| 9               | ○     | ○       | ○         |            |         |          |        |            |         |       |
| 10              |       | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 11              | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 12              |       | ○       |           |            | ○       |          |        |            |         | ○     |
| 13              | ○     | ○       |           | ○          |         | ○        |        |            |         |       |
| 14              |       | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 15              | ○     |         | ○         |            | ○       |          | ○      |            |         | ○     |
| 16              | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 17              | ○     | ○       | ○         |            | ○       | ○        | ○      | ○          | ○       |       |
| 18              | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            | ○       |       |
| 19              | ○     | ○       |           |            |         |          |        | ○          |         |       |
| 20              | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 21              | ○     | ○       | ○         | ○          |         |          | ○      | ○          | ○       |       |
| 22              | ○     | ○       | ○         |            |         |          |        | ○          | ○       |       |
| 23              | ○     | ○       | ○         |            |         | ○        | ○      | ○          | ○       |       |
| 24              | ○     |         |           |            |         | ○        |        |            |         | ○     |
| 25              | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 26              |       | ○       | ○         |            | ○       |          |        |            | ○       |       |
| 27              | ○     |         |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 28              |       | ○       |           |            | ○       |          |        |            |         |       |
| 29              |       | ○       |           | ○          |         |          | ○      |            |         |       |
| 30              | ○     | ○       | ○         |            |         |          |        |            |         |       |
| 31              | ○     | ○       |           | ○          |         |          |        |            | ○       | ○     |
| 32              |       | ○       |           |            |         |          |        | ○          |         |       |
| 33              | ○     | ○       | ○         | ○          |         |          |        |            |         |       |
| 34              | ○     | ○       |           |            | ○       | ○        | ○      | ○          |         | ○     |
| 35              | ○     | ○       |           |            | ○       | ○        |        |            | ○       |       |
| 36              | ○     | ○       | ○         |            |         |          |        |            |         |       |
| 37              | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 38              | ○     | ○       |           |            | ○       |          | ○      | ○          | ○       |       |
| 39              | ○     | ○       |           |            |         |          |        | ○          | ○       |       |
| 40              | ○     | ○       | ○         |            | ○       | ○        | ○      | ○          | ○       |       |
| 41              | ○     | ○       | ○         |            | ○       | ○        | ○      | ○          | ○       |       |
| 42              |       | ○       | ○         |            |         |          |        |            |         |       |
| 43              | ○     | ○       | ○         |            | ○       |          |        | ○          | ○       |       |
| 44              |       |         | ○         |            |         |          |        |            | ○       |       |
| 合計              | 33    | 39      | 17        | 5          | 13      | 10       | 12     | 13         | 18      | 6     |
| 該当文献数(44)の中での割合 | 75.0% | 88.6%   | 38.6%     | 11.4%      | 29.5%   | 22.7%    | 27.3%  | 29.5%      | 40.9%   | 13.6% |



### (1) 医療分野

「ICF」と「医療」でヒットした文献数は54、「ICF」と「リハ」でヒットした文献数は43であった。これらの論文及び他のキーワードでヒットした論文も合わせて内容を確認し、医療分野におけるICF又はICF-CY活用に関する文献として43件を採用した。さらに、本研究所の関連研究成果報告書で報告した文献1件も合わせて合計44件を対象として分析を行った。

文献44件について、①から⑩までの観点との対応関係を整理すると表5のようになった。医療分野全体の記述の状況について、観点別に件数が多かった順に示す。医療分野の該当文献数（44件）に対する割合は括弧書きで記した。最も多かったのは、②「構成要素」39件（88.6%）、次に多かったのは①「概念」33件（75.0%）で、双方とも4分3以上の文献で記述が見られた。以降は、それぞれ2分の1を下回り、⑨「共通言語」18件（40.9%）、③「図式又は書式」17件（38.6%）、⑤「詳細分類」及び⑧「実行状況と能力」13件（29.5%）、⑦「評価点」12件（27.3%）、⑥「コアセット」10件（22.7%）、⑩「統計」6件（13.6%）の順で続いた。最も少ないのは④「第2レベルまで」5件（11.4%）であった。

### (2) 福祉分野

「ICF」と「福祉」でヒットした文献数は74であった。これらの論文及び他のキーワードでヒットした論文も合わせて内容を確認し、福祉分野におけるICF又はICF-CY活用に関する文献として36件を採用した。さらに、本研究所の関連研究成果報告書で報告した文献2件、本研究所での研究に関連して発行した冊子中の文献1件も合わせて合計39件を対象として分析を行った。

文献39件について、①から⑩までの観点との対応関係を整理すると表6のようになった。福祉分野全体の記述の状況について、観点別に多かった順に件数と福祉分野の該当文献数（36件）に対する割合を括弧書きで記す。最も多かったのは、①「概念」35件（89.7%）、次に多かったのは②「構成要素」33件（84.6%）で、双方とも8割以上の文献で記述が見られた。以降は、それぞれ2分の1を下回り、⑨「共

通言語」14件（35.9%）、⑤「詳細分類」10件（25.6%）、⑦「評価点」9件（23.1%）、⑧「実行状況と能力」8件（20.5%）、③「図式又は書式」7件（17.9%）、④「第2レベルまで」6件（15.4%）、⑥「コアセット」5件（12.8%）の順であったと続いた。最も少ないのは⑩「統計」1件（2.6%）であった。

### (3) 保健分野

「ICF」と「保健」でヒットした文献数は43であった。これらの論文及び他のキーワードでヒットした論文も合わせて内容を確認し、医療分野におけるICF又はICF-CY活用に関する文献として13件を採用した。さらに、本研究所での研究に関連して発行した冊子中の文献1件も合わせて合計14件を対象として分析を行った。

文献14件について、①から⑩までの観点との対応関係を整理すると表7のようになった。保健分野全体の記述の状況について、観点別に多かった順に件数と保健分野の該当文献数（14件）に対する割合を括弧書きで記す。最も多かったのは、①「概念」13件（92.9%）、次に多かったのは②「構成要素」12件（85.7%）で、双方とも8割以上の文献で記述が見られた。以降は、それぞれ2分の1を下回り、④「第2レベルまで」5件（35.7%）、③「図式又は書式」及び⑦「評価点」2件（14.3%）、⑤「詳細分類」、⑥「コアセット」、⑧「実行状況と能力」、⑨「共通言語」及び⑩「統計」1件（7.1%）の順であった。

### (4) 労働分野

「ICF」と「雇用」でヒットした文献数は3、「ICF」と「就労」でヒットした文献は3であった。これらの論文及び他のキーワードでヒットした論文も合わせて内容を確認し、労働分野におけるICF又はICF-CY活用に関する文献として6件を採用した。さらに、本研究所の関連研究成果報告書で報告した文献2件、本研究所での研究に関連して発行した冊子中の文献1件、著者の一人が所属する障害者職業総合センターから報告された研究のうち、ICFが明示的に活用された報告書6件をも加え、合計15件を対象として分析を行った。

文献15件について、①から⑩までの観点との対応



表6 福祉分野におけるICF又はICF-CY活用に関する文献の記述

| 文献番号            | 記述の観点 |         |           |            |         |          |        |            |         |       |
|-----------------|-------|---------|-----------|------------|---------|----------|--------|------------|---------|-------|
|                 | ①「概念」 | ②「構成要素」 | ③「図式又は書式」 | ④「第2レベルまで」 | ⑤「詳細分類」 | ⑥「コアセット」 | ⑦「評価点」 | ⑧「実行状況と能力」 | ⑨「共通言語」 | ⑩「統計」 |
| 1               | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 2               | ○     | ○       |           |            |         | ○        |        |            |         |       |
| 3               | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 4               | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            | ○       |       |
| 5               | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 6               | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            | ○       |       |
| 7               | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            | ○       |       |
| 8               | ○     | ○       |           |            | ○       | ○        |        |            | ○       | ○     |
| 9               |       | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 10              | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 11              | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 12              | ○     | ○       |           | ○          |         |          | ○      | ○          |         |       |
| 13              | ○     | ○       | ○         |            | ○       | ○        | ○      | ○          | ○       |       |
| 14              | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 15              | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 16              |       | ○       |           | ○          |         |          |        |            |         |       |
| 17              | ○     |         |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 18              | ○     | ○       | ○         |            |         |          |        |            |         |       |
| 19              | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 20              | ○     | ○       |           | ○          |         |          |        |            | ○       |       |
| 21              | ○     | ○       |           | ○          |         |          |        |            |         |       |
| 22              | ○     | ○       |           |            | ○       |          |        | ○          | ○       |       |
| 23              | ○     | ○       |           |            | ○       |          |        | ○          | ○       |       |
| 24              | ○     |         |           |            | ○       |          |        |            |         |       |
| 25              | ○     | ○       | ○         |            | ○       |          | ○      | ○          |         |       |
| 26              | ○     | ○       | ○         |            |         |          |        | ○          |         |       |
| 27              | ○     | ○       | ○         |            |         |          |        |            |         |       |
| 28              | ○     | ○       |           |            |         |          |        | ○          | ○       |       |
| 29              |       | ○       |           | ○          |         | ○        | ○      |            |         |       |
| 30              | ○     | ○       |           |            | ○       |          | ○      |            |         |       |
| 31              | ○     | ○       | ○         |            | ○       |          | ○      |            | ○       |       |
| 32              | ○     | ○       |           |            | ○       | ○        | ○      |            | ○       |       |
| 33              | ○     | ○       |           | ○          |         |          |        |            | ○       |       |
| 34              | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 35              |       |         |           |            | ○       |          |        |            |         |       |
| 36              | ○     |         |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 37              | ○     |         |           |            |         |          | ○      |            | ○       |       |
| 38              | ○     |         |           |            |         |          | ○      |            | ○       |       |
| 39              | ○     | ○       | ○         |            |         |          |        | ○          |         |       |
| 合計              | 35    | 33      | 7         | 6          | 10      | 5        | 9      | 8          | 14      | 1     |
| 該当文献数(39)の中での割合 | 89.7% | 84.6%   | 17.9%     | 15.4%      | 25.6%   | 12.8%    | 23.1%  | 20.5%      | 35.9%   | 2.6%  |

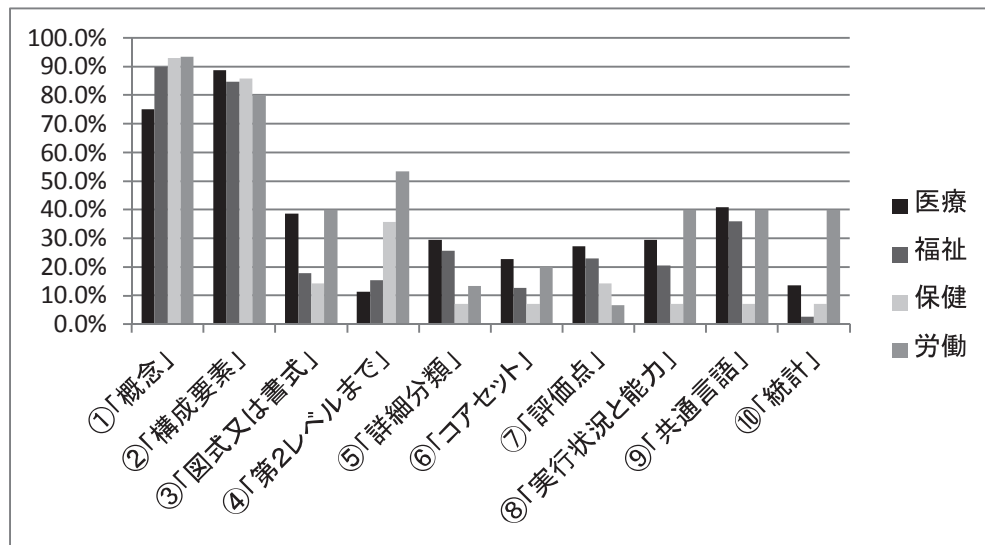
表7 保健分野におけるICF又はICF-CY活用に関する文献の記述

| 文献番号            | 記述の観点 |         |           |            |         |          |        |            |         |       |
|-----------------|-------|---------|-----------|------------|---------|----------|--------|------------|---------|-------|
|                 | ①「概念」 | ②「構成要素」 | ③「図式又は書式」 | ④「第2レベルまで」 | ⑤「詳細分類」 | ⑥「コアセット」 | ⑦「評価点」 | ⑧「実行状況と能力」 | ⑨「共通言語」 | ⑩「統計」 |
| 1               | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 2               | ○     | ○       | ○         |            |         |          |        |            |         |       |
| 3               |       | ○       |           |            |         |          | ○      |            |         |       |
| 4               | ○     | ○       |           |            | ○       | ○        | ○      |            |         | ○     |
| 5               | ○     | ○       |           | ○          |         |          |        |            |         |       |
| 6               | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            | ○       |       |
| 7               | ○     |         |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 8               | ○     | ○       |           | ○          |         |          |        |            |         |       |
| 9               | ○     | ○       |           | ○          |         |          |        |            |         |       |
| 10              | ○     | ○       |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 11              | ○     |         |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 12              | ○     | ○       | ○         |            |         |          |        |            | ○       |       |
| 13              | ○     | ○       |           | ○          |         |          |        |            |         |       |
| 14              | ○     | ○       |           | ○          |         |          |        | ○          |         |       |
| 合計              | 13    | 12      | 2         | 5          | 1       | 1        | 2      | 1          | 1       | 1     |
| 該当文献数(14)の中での割合 | 92.9% | 85.7%   | 14.3%     | 35.7%      | 7.1%    | 7.1%     | 14.3%  | 7.1%       | 7.1%    | 7.1%  |

表8 労働分野におけるICF又はICF-CY活用に関する文献の記述

| 文献番号            | 記述の観点 |         |           |            |         |          |        |            |         |       |
|-----------------|-------|---------|-----------|------------|---------|----------|--------|------------|---------|-------|
|                 | ①「概念」 | ②「構成要素」 | ③「図式又は書式」 | ④「第2レベルまで」 | ⑤「詳細分類」 | ⑥「コアセット」 | ⑦「評価点」 | ⑧「実行状況と能力」 | ⑨「共通言語」 | ⑩「統計」 |
| 1               | ○     | ○       |           | ○          |         | ○        |        |            |         | ○     |
| 2               | ○     | ○       | ○         | ○          |         |          |        | ○          | ○       | ○     |
| 3               | ○     | ○       |           | ○          |         |          |        | ○          | ○       |       |
| 4               | ○     | ○       |           |            |         |          |        | ○          | ○       |       |
| 5               | ○     | ○       |           | ○          |         |          |        |            | ○       |       |
| 6               | ○     |         | ○         |            |         |          |        |            |         |       |
| 7               | ○     | ○       |           |            |         |          |        | ○          |         |       |
| 8               | ○     |         |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 9               | ○     | ○       | ○         | ○          |         |          |        |            |         |       |
| 10              | ○     | ○       | ○         | ○          |         | ○        |        |            | ○       | ○     |
| 11              | ○     | ○       | ○         | ○          |         | ○        |        | ○          | ○       | ○     |
| 12              | ○     | ○       |           |            | ○       |          |        |            |         | ○     |
| 13              | ○     | ○       | ○         | ○          |         |          | ○      | ○          |         | ○     |
| 14              |       | ○       |           |            | ○       |          |        |            |         |       |
| 15              | ○     |         |           |            |         |          |        |            |         |       |
| 合計              | 14    | 12      | 6         | 8          | 2       | 3        | 1      | 6          | 6       | 6     |
| 該当文献数(15)の中での割合 | 93.3% | 80.0%   | 40.0%     | 53.3%      | 13.3%   | 20.0%    | 6.7%   | 40.0%      | 40.0%   | 40.0% |

図1 分野毎の各観点の記述割合



関係を整理すると表8のようになった。労働分野全体の記述の状況について、観点別に多かった順に件数と労働分野の該当文献数（15件）に対する割合を括弧書きで記す。最も多かったのは、①「概念」14件（93.3%）、次に②「構成要素」12件（80.0%）、④「第2レベルまで」8件（53.3%）で、以上が半数を上回る文献で記述が見られた。以降は、③「図式又は書式」、⑧「実行状況と能力」、⑨「共通言語」及び⑩「統計」が6件（40.0%）で並び、⑥「コアセット」3件（20.0%）、⑤「詳細分類」2件（13.3%）の順で続いた。最も少ないのは⑦「評価点」1件（6.7%）であった。

## IV 考察

### 1. 関連分野全体におけるICF又はICF-CY活用に関する記述の特徴

医療、福祉、保健、労働の4分野それぞれで見られた各観点の記述の割合についてまとめると図1のようになった。

各分野に共通して記述の割合が高かった観点は「障害が全ての人に関わりあうものであること、環境との関わりあい要素の一つとしていること、また、各因子（筆者註：「構成要素」の意）が相互に関連しあっているなど（中川，2002）」等の「概念」

についての記述であった。

同じく、「構成要素」についての記述も多く見られた。それらの多くは「概念」に関連させながら記述されていたが、中には、分類項目を用いた事例の分析の説明として構成要素について記述したもの（山内他，2008）も見られた。

4分野に共通しているものとしては、これら2つの観点以外は半数以下であった。一方、労働分野における「第2レベルまで」のみが53.3%で半数を超え、「詳細分類」も合わせると66.7%であり、分類項目についての記述が多かった。労働分野では「統計」についても他の3分野より多く、調査等の統計への活用の相対的な多さが推測できた。

### 2. 関連各分野と特別支援学校との比較の試み

関連4分野については、文献における記述を対象としたものであり、該当の観点について記述のあった文献数の各分野の文献数全体に占める割合を算出している。一方で、特別支援学校における活用状況については、実際の活用状況を尋ねたものであり、算出された割合は活用している学校全体を分母、該当項目を回答した学校数を分子として算出したものである。また、特別支援学校は特別支援教育と同義ではないが、特別支援学校に対して地域における特別支援教育の中核としての役割の期待が指摘されて

表9 関連各分野と特別支援学校との比較の試み

| 順位 | 医療              | 福祉              | 保健              | 労働              | 特別支援学校                        |
|----|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-------------------------------|
| 1  | ②「構成要素」88.6%    | ①「概念」89.7%      | ①「概念」92.9%      | ①「概念」93.3%      | ア)「考え方」59.8%                  |
| 2  | ①「概念」75.0%      | ②「構成要素」84.6%    | ②「構成要素」85.7%    | ②「構成要素」80.0%    | オ)「参加」を重視34.3%                |
| 3  | ⑨「共通言語」40.9%    | ⑨「共通言語」35.9%    | ④「第2レベルまで」35.7% | ④「第2レベルまで」53.3% | ク)「ICF関連図」で情報を整理32.0%         |
| 4  | ③「図式又は書式」38.6%  | ⑤「詳細分類」25.6%    | ⑦「評価点」14.3%     | ③「図式又は書式」40.0%  | カ)「環境因子」を重視26.6%              |
| 5  | ⑤「詳細分類」29.5%    | ⑦「評価点」23.1%     | ③「図式又は書式」14.3%  | ⑨「共通言語」40.0%    | (目的)関連機関・関係者等との共通理解・連携26.6%   |
| 6  | ⑧「実行状況と能力」29.5% | ⑧「実行状況と能力」20.5% | ⑨「共通言語」7.1%     | ⑧「実行状況と能力」40.0% | エ)「活動」を重視24.9%                |
| 7  | ⑦「評価点」27.3%     | ③「図式又は書式」17.9%  | ⑤「詳細分類」7.1%     | ⑩「統計」40.0%      | ケ)「ICF関連図」で複数の情報の関連づけ20.1%    |
| 8  | ⑥「コアセット」22.7%   | ④「第2レベルまで」15.4% | ⑧「実行状況と能力」7.1%  | ⑥「コアセット」20.0%   | シ)「ICFチェックリスト」等による分類項目の活用9.5% |
| 9  | ⑩「統計」13.6%      | ⑥「コアセット」12.8%   | ⑥「コアセット」7.1%    | ⑤「詳細分類」13.3%    | キ)「個人因子」を重視6.5%               |
| 10 | ④「第2レベルまで」11.4% | ⑩「統計」2.6%       | ⑩「統計」7.1%       | ⑦「評価点」6.7%      | ス)チェックリストではなく、分類項目そのものを活用6.5% |
| 11 |                 |                 |                 |                 | サ)作成された「ICF関連図」を共有5.9%        |
| 12 |                 |                 |                 |                 | ウ)「心身機能・身体構造」を重視5.3%          |
| 13 |                 |                 |                 |                 | コ)「ICF関連図」作成作業を共有4.7%         |
| 14 |                 |                 |                 |                 | イ)「健康状態」を重視1.8%               |
| 15 |                 |                 |                 |                 | (場面)統計的な情報の整理において1.2%         |
| 16 |                 |                 |                 |                 | セ)評価点を活用0.6%                  |
| 17 |                 |                 |                 |                 | ソ)その他0.0%                     |

いる（文部科学省初等中等教育局長，2007）ことを踏まえ，関連各分野との特別支援教育分野の比較を試みるために本調査の結果を用いることは可能だと判断した。そのために，便宜的に次のような操作を行い，関連分野と特別支援学校とでの比較検討を試みた。

1) 特別支援学校を対象とした「活用の観点」の全ての選択肢15項目に，次の2項目を加える。

- a) 関連分野分析の観点⑨「共通言語」にもっとも意味が近いと考えられる「活用の目的」の中の選択肢「校外の関連機関・関係者等との共通理解・連携のために」
- b) 関連分野分析の観点⑩「統計」にもっとも意味が近いと考えられる「活用の場面」の中の選択肢「統計的な情報の整理において」

なお，関連分野の観点⑧「実行状況と能力」については，意味が近い選択肢はない。

2) 関連分野の観点10項目と特別支援学校調査の選択肢17項目とを分野毎に割合の大きい順に並び替える。

以上のような手順で整理すると，表9のようになった。

関連分野では観点①「概念」が共通して上位にあるが，同様に，特別支援学校調査においても，本観点「概念」に対応した「ア）考え方」が最も多い。佐藤（2005）は，ICFを活用する際の重要な特徴の一つとして，「心身機能」だけでなく「活動」，「参加」に注目することを指摘している。このことを踏まえると，3番目に多かった「オ）『参加』を重視」や6番目に多い「エ）『活動』を重視」は，観点「②構成要素」に対応させたイ）～キ）の中でも，ICFの概念の特徴を表したものだと考えられる。上田（2005）は，ICF活用の基本姿勢として，ICFの概念モデルに示された基本的な考え方に基づ



いてケースを理解することが重要である旨を述べている。今回の結果から、関連分野及び特別支援学校においても、活用においてICF/ICF-CYの概念を重視していることが推測される。したがって、関連分野と連携にICF又はICF-CYを活用する際には、その概念を活用したケースの理解の活用が有効ではないかと推測される。

一方、特別支援学校調査ではICFの概念を摸した図「ICF関連図」で子どもの情報等を整理することが3番目に多く、特別支援教育における「ICF関連図」を用いた取組は決して少なくないことが報告されている（徳永他，2010）。また、前述のとおり、ICF又はICF-CYを活用している特別支援学校の中では、個別の教育支援計画において活用していることがもっとも多く、特別支援学校学習指導要領等の解説においては個別の教育支援計画についてICFを参考にすることが述べられている。特別支援学校調査の目的の関連機関・関係者等との共通理解・連携が5番目に多くなっていることと合わせて考えると、関連分野との連携には、共通して重視している概念を摸した図やICF又はICF-CYを活用した書式の使用等が有効ではないかと推測される。

関連分野においては、医療分野及び労働分野において、観点⑨「共通言語」及び観点③「図式や書式」が共に40%前後で比較的多くなっていることから、これらの分野との連携において、ICF又はICF-CYを活用した図式や書式が有効となる可能性が考えられる。

関連分野の中では、労働分野において分類項目についての記述が比較的多いことを既に述べたが、医療・保健・労働分野においても、観点④「第2レベルまで」と観点⑤「詳細分類」を合わせるといずれも40%を超える。一方、特別支援学校調査では、分類項目に関する選択肢は二つとも1割に満たない。このことから、連携における分類項目の活用は、特別支援学校側にとって、少なくとも調査時点では親和性が高くないと考えられる。

分類項目の評価点の活用については、特別支援学校では多くないことを既に述べたが、関連分野と比較するとより少ないことがわかる。関連分野では田中（2005）や厚生労働省（2007）のような評価基準

について工夫が見られるが教育分野での独自の工夫は見当たらず、教育分野での工夫は今後の検討課題の一つと考えられる。連携の際にICF又はICF-CYを活用する場合には、特別支援学校側も少なくとも分類項目や評価点の大まかな意味は理解しておく必要があるのではないかと考える。

## V まとめと今後の課題

特別支援教育関連分野として、医療、福祉、保健、労働各分野におけるICF又はICF-CY活用に関する文献の記述内容の分析の結果、各分野の共通点と相違点を大まかに把握することができた。各分野に共通していることとしては、ICF及びICF-CYの概念や構成要素に関する記述の多さであった。相違点としては、労働分野における分類項目や統計への言及が比較的多いことが挙げられた。

また、関連分野と特別支援教育分野におけるICF又はICF-CY活用について比較するために、特別支援学校を対象にした調査結果との比較検討を試みた結果、関連各分野との共通点や相違点を大まかに把握するとともに、連携にあたっての知見が得られた。共通点としてはICF及びICF-CYの概念の活用を重視していると考えられ、連携にあたっては、概念を用いる有効性が示された。概念を生かした図式や書式については医療分野や労働分野との連携における活用が有効と考えられた。相違点としては、特別支援学校に比べ、関連分野のほうがより分類項目や評価点への言及が多く、連携においてICF又はICF-CYを活用する際は、少なくともこれらの意味を特別支援学校側も知っておく必要性が示された。

本研究をとおして得られた関連各分野及び特別支援教育分野のICF又はICF-CYの活用についての知見は今後の連携を考える上での手がかりとなると考える。関連分野との連携にICF又はICF-CYを活用する際には、各分野での業務内容の違いに加え、これらのICF又はICF-CY活用上の特徴も踏まえる必要性が示された。

今後の課題としては、以下の点が考えられる。

- ①限られた文献数ではあったが、それぞれの記述内容を量的に整理・検討することで大まかな検討は

できたが、さらに質的な検討が必要である。

- ②関連「分野」としての比較を行ったが、例えば医療分野の中でも、医師、看護師、理学療法士等、職種の違いがあり、また対象としている患者の年齢や疾患の違い等がある。実際の連携についてより具体的な知見を得るためには、さらにそれらの違いによりICF又はICF-CY活用の在り方がどのように変わるのかについて検討する必要がある。
- ③2001年のICFの採択直後はICFそのものの紹介や概念を中心に述べたものが多かったのに対し、比較的新しい文献では分類項目を調査結果の分析に用いた取組や評価点の活用への言及も多く見られる。また、引用文献についても初期は和文が多かったが、諸外国の取組、中でも目的別の分類項目のセットであるコアセットについて触れるもの等も増えてきている（内山，2009他）。それらの推移についてより詳細な分析の必要性が考えられる。また、諸外国の動向を把握・分析するとともに、そのことを通して、日本の特徴、各分野の特徴をさらに分析し、より有効な連携の仕方についての検討する必要性が考えられる。

## 文献

### <本研究で分析対象とした関連分野におけるICF又はICF-CYの活用に関する論文一覧>

#### ○医療分野に関するもの

- 1) 浅川育世・白田滋・佐藤弘行 (2008). 理学療法士における国際生活機能分類の認知度と活用状況. 理学療法科学, 23 (2), 267-273.
- 2) 浅川育世・佐藤裕子・白田滋 (2011). 国際生活機能分類「活動制限」の評価の検者間信頼性：FIM対応コードからの検討. 理学療法科学, 26 (1), 149-155.
- 3) 大工谷新一 (2008). 国際生活機能分類からみたリハビリテーション. 関西理学療法, 8, 57-61.
- 4) 藤本保志・山田裕子・安藤篤・中島務 (2005). 頭頸部癌術後の咀嚼・嚥下リハビリテーション：耳鼻咽喉科医としての役割. 頭頸部癌, 31 (3), 326-330.
- 5) 原口健三・長谷麻由・多賀誠・島津久美・西村栄美・中野桂子・小川優美・大丸民・糸井真美・日下部修・丹羽敦 (2006). ICFによる症例報告指針（モデル案）の紹介とその有効性. 柳川リハビリテーション学院・

- 福岡国際医療福祉学院紀要, 2, 24-28.
- 6) 細井俊希・澤田豊・加藤剛平・藤田博暁・高橋邦泰・黒川幸雄 (2011). 回復期リハビリテーション病棟入院患者の活動量の変化:退院前後1ヶ月での活動量の比較. 理学療法科学, 26 (1), 111-115.
  - 7) 五十嵐進 (2007). 国際生活機能分類を基盤にしたリハビリテーションチーム医療. 医療 61 (5), 292-296.
  - 8) 伊勢田堯 (2002). 国際生活機能分類 (ICF) と精神障害. 精神障害とリハビリテーション, 6 (1), 45-49.
  - 9) 石田利江 (2011). ICFを基盤とした中枢神経疾患患者の評価と治療の実践. 理学療法学, 38 (8), 617-619.
  - 10) 石坂正大・金子純一郎・福田真人・坂川昌隆・丸山仁司 (2010). 回復期リハビリテーションにおける至適運動負荷指標の検討：ICFに基づく帰結評価を用いた介入比較研究. 理学療法学, 37 (2), 110-111.
  - 11) 神沢信行 (2007). 生活機能向上への理学療法士の貢献：脳血管障害を中心に. 甲南女子大学研究紀要, 看護学・リハビリテーション学編, 創刊号, 7-14.
  - 12) 古関友美・永井善大・山西葉子・友利幸之介・東登志夫 (2009). 国際生活機能分類による在宅要介護者が日常生活において困難と感じている作業に関する調査. 作業療法, 28 (4), 385-395.
  - 13) 栗原まな (2006). てんかん発作とてんかんの診断大要案: 軸5の活用に向けて. てんかん研究, 24 (1), 18-25.
  - 14) 前岡恵美 (2008). 失語症者の能動的態度に関する検討: 評価表の作成を試みて. 音声言語医学, 49 (4), 248-253.
  - 15) 真柄彰 (2011). 保健医療福祉連携教育からみたICFの利用状況. 厚生指標, 58 (1), 32-35.
  - 16) 松下太 (2010). 認知症高齢者の理解と作業療法. 大阪作業療法ジャーナル, 23 (2), 11-16.
  - 17) 二唐東朔 (2004). 国際生活機能分類をふまえた視能矯正訓練士の役割. Japanese orthoptic journal 33, 15-20.
  - 18) 丹羽敦・長谷麻由・原口健三 (2005). ICFの特性を活かした臨床実習に向けた学内・臨床指導の視点. 国際医療福祉大学リハビリテーション学部紀要, 1, 59-66.
  - 19) 野尻晋一・山永裕明・大久保智明 (2007). 訪問リハビリテーションにおける在宅支援の視点（シンポジウム 在宅高齢者への支援）. 言語聴覚研究, 4 (2),

- 78-86.
- 20) Ohgane Kunishige, Ohgane Akane, Okawa Yayoi (2006). A relationship between levels in Functioning. インテリジェントシステム・シンポジウム講演論文集 16, 79-80.
- 21) 岡田幸之・松本俊彦・野口博文・安藤久美子・平林直次・吉川和男 (2007). ICFの精神医療への導入-ICFに基づく精神医療実施計画書の開発. 精神医学, 49 (1), 41-48.
- 22) 大川弥生 (2004). リハビリテーションに携る者としての資質:職業倫理と科学性. 理学療法学, 31 (4), 227-232.
- 23) 大川弥生 (2009). ICFから高齢者医療・介護を考える:生活機能学の立場から. 老年看護学, 13 (2), 18-27.
- 24) 大川弥生 (2011). 災害時の生活不活発病の重要性-その多発と予防. 医学のあゆみ, 239 (5), 492-496.
- 25) 大槻利夫 (2010). 連載第2回 ポバースアプローチ, 現在そして将来にわたり発展しつづける概念と治療実践 その1:ICFに基づいた評価と治療. 理学療法学, 37 (2), 122-126.
- 26) 堺裕 (2009). リハビリテーション分野におけるICF-CY活用への期待-教育との連携を中心に-. 国立特別支援教育総合研究所「ICF児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究」研究成果報告書, 135-139.
- 27) 島田智織・秋元陽子・小林幸子・梶原祥子・加納尚美・黒木淳子・服部満生子・落合幸子・小松美穂子 (2006). リハビリテーション期にある患者への化粧療法への取り組み:ユニフィケーションの視点から. 茨城県立医療大学紀要, 11, 163-171.
- 28) Samyra H. J. Keus, Bloem Bastiaan R., Hendriks Erik J. M. et. al (2007). エビデンスに基づいたパーキンソン病理学療法の分析と臨床と研究のための勧告. Movement disorders, 1 (1), 13-22.
- 29) 佐藤徳太郎 (2003). 糖尿病とリハビリテーション. リハビリテーション医学, 40 (2), 141-148.
- 30) 心光世津子・遠藤淑美・諏訪さゆり (2010). 精神看護学実習のためのICFの視点を取り入れた看護過程自己評価表の開発. 日本精神保健看護学会誌, 19 (1), 74-83.
- 31) 鷹野昭士 (2003). ICF国際障害分類とこれからのリハビリテーションを考える. 日本義肢装具学会誌, 19 (3), 179-180.
- 32) 外山稔・森淳一・飯干紀代子・笠井新一郎・佐藤浩二・衛藤宏 (2005). 回復期リハビリテーション病棟における失語症患者のコミュニケーション活動の評価-CADL成績と実行状況の比較. 言語聴覚研究, 2 (3), 168-175.
- 33) 坪井真 (2009). 老年歯科医療と高齢者福祉:国際生活機能分類 (ICF) の健康概念に基づく両分野の関係性 (1). 老年歯科医学, 24 (3), 311-315.
- 34) 坪井真 (2010). 老年歯科医療と高齢者福祉:国際生活機能分類 (ICF) の健康概念に基づく両分野の関係性 (2). 老年歯科医学, 24 (4), 381-388.
- 35) 坪井真 (2010). 老年歯科医療と高齢者福祉:国際生活機能分類 (ICF) の健康概念に基づく両分野の関係性 (3). 老年歯科医学, 25 (2), 147-152.
- 36) 内山美根子・小澤壽江・遠藤伊豆美 (2008). ICFを活用した精神科リハビリテーションにおける評価の実際:評価表の分析による考察. 病院・地域精神医学, 50 (3), 269.
- 37) 内山靖 (2007). ICFに基づく理学療法の展望と課題. 理学療法学, 34 (4), 99-102.
- 38) 上田敏 (2002). 新しい障害概念と21世紀のリハビリテーション医学:ICIDHからICFへ. リハビリテーション医学, 39 (3), 123-127.
- 39) 上田敏 (2002). ICF:WHO国際生活機能分類 (国際障害分類改訂版) と21世紀の作業療法:プラスの生活機能をどう捉え, どう生かすか. 作業療法, 21 (6), 516-521.
- 40) 上田敏 (2003). 国際生活機能分類 (ICF) とリハビリテーション医学の課題. リハビリテーション医学, 40 (11), 737-743.
- 41) 上田敏 (2004). ICF:国際生活機能分類と高次脳機能障害 (カレントスピーチ). 高次脳機能研究, 24 (3), 244-25.
- 42) 若野貴司・末吉勝則・大城宜哲・寺本洋一・高谷富江・石川治・今脇節朗 (2009). 回復期リハビリテーション病院におけるセラピューティックレクリエーションの取り組みについて-個別介入プログラムでの症例を通して. レジャー・レクリエーション研究, (63), 50-53.
- 43) 綿森淑子 (2006). 失語症リハビリテーションの最近の動向とICF. 県立広島大学保健福祉学部誌 人間と科学, 6 (1), 5-16.
- 44) 吉川卓司 (2006). 理学療法の現状と展望. リハビリテーション科学ジャーナル, 1, 3-10.



## ○福祉分野に関するもの

- 1) 中越竜馬・横井輝夫・加藤美樹 (2010). 障害に対し心理・社会的に適応していった脳血管障害後遺症者の事例-ICFモデルにおける「活動」への働きかけを通して. 吉備国際大学保健福祉研究所研究紀要, (11), 1-4.
- 2) 太湯好子・中島 望・川崎緑・李志嬉・桐野匡史・中嶋和夫 (2010). 地域高齢者のICFに基づく機能的・構造的統合性の測定尺度の検討. 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 17, 7-17.
- 3) 市原正隆 (2010). 居住環境整備における医療: 福祉からのアプローチ. 岐阜医療科学大学紀要, 4, 45-59.
- 4) 濱田佐知子 (2008). 介護福祉従事者を対象としたICFの理解と活用-ICFモデルを理解するための教育方法の試論. 四天王寺大学紀要, (46), 465-475.
- 5) 堀敦志・本間博文・桜井康宏 (2007). 介護予防を目的とした高齢者の住環境とADL・QOLの関係に関する調査研究. 日本建築学会計画系論文集 (620), 1-7.
- 6) 金文華 (2009). 中国における知的障害者の活動と参加に関する評価: ICFを用いた評価を通して. 長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要, 7 (1), 81-84.
- 7) 神山裕美 (2006). ストレngths視点によるジェネラリスト・ソーシャルワーク: 地域生活支援に向けた視点と枠組み. 山梨県立大学人間福祉学部紀要, 1, 1-10.
- 8) 樫部公一・岡田美保子 (2008). ICFの概念を支える用語に関する研究. 川崎医療福祉学会誌, 18 (1), 187-194.
- 9) 川島麻子・出澤華奈子・今瀬留理子・国府田まゆみ・斉藤悟・高島真澄・松本直行・吉田昭久 (2008). 精神障害者グループホームのQOLに関する第三者評価課題II: 全国調査結果とICFとの関連. 病院・地域精神医学, 51 (1), 74-76.
- 10) 増田公香 (2004). 加齢する肢体不自由障害をもつ人々の参加の要因分析: 障害種類別にみる特性に焦点を置いて. 社会福祉学, 45 (1), 35-45.
- 11) 松浦晴美・本多留美 (2005). 介護老人保健施設での言語聴覚士のあり方を模索して. コミュニケーション障害学, 22 (1), 41-46.
- 12) Mita Takehiko, Mikami Fumiaki, Oda Ko, Okada Kitoku (2012). Associations between Mobility Restriction and Motor and Intellectual Impairments, and the Impact of Environmental Factors in Children with Disabilities. *Kawasaki journal of medical welfare*, 17 (2), 80-86.
- 13) 三田岳彦・三上史哲・堀野宏樹・伊丹寿子・杉本明生・小田滋・岡田喜篤 (2010). 肢体不自由児施設入所者の余暇活動時における生活機能と環境因子の評価. 川崎医療福祉学会誌, 19 (2), 339-346.
- 14) 水村容子 (2004). サリドマイド胎芽病による上肢障害者のケーススタディからみた住要求と住環境整備に関する研究: 日本とスウェーデンの比較から. 日本家政学会誌, 55 (8), 623-634.
- 15) 長崎和則 (2007). 障害程度区分のあり方-ICFの視点から考える. 精神障害とリハビリテーション, 11 (2), 122-126.
- 16) Nagata Chizuru (2012). The utilization of personal mobility in an Aging Society and Quality of Life : from the view point of ICF Activities and Participation dimensions. 熊本大学医学部保健学科紀要, 8, 47-59.
- 17) 中川昭夫 (2002). 福祉介護機器を取り巻く環境. 関西支部講演会講演論文集 (77), "1-1"- "1-4".
- 18) 野口祐子・橋本彼路子・阪東美智子・西村顕 (2009). 肢体不自由児のいる家庭の住環境整備のあり方とその介入の方策の検討: その2 訪問調査からみた子育てと住環境の実態. 学術講演梗概集, 243-244.
- 19) 西尾敦史 (2007). 「援助困難」のみかた: 沖縄県地域福祉権利擁護事業の実態調査 (2007) から. 沖縄大学人文学部紀要, 10, 77-95.
- 20) 小木曾加奈子・安藤邑恵 (2011). 認知症高齢者のケアに対する「環境因子」に関する看護職と介護職の認識の違い: 介護老人保健施設のインタビュー調査から. 岐阜医療科学大学紀要, 5, 1-7.
- 21) 小木曾加奈子・今井七重 (2010). 要介護高齢者に対する転倒・転落におけるリスクマネジメント: 転倒・転落振り返りシートの分析. 岐阜医療科学大学紀要, 4, 19-26.
- 22) 齋藤深雪 (2007) 「精神障害者生活機能評価尺度 (参加面)」の開発研究. 日本保健福祉学会誌, 14 (1).
- 23) 齋藤深雪 (2008). 「精神障害者生活機能評価尺度 (活動面)」の開発についての研究. 日本精神保健看護学会誌, 17 (1), 44-52.
- 24) 佐古崇・長澤夏子・渡辺仁史 (2007). 人間と空間のインターフェースとしての福祉ロボット・福祉機器に関する研究: ICFコードを用いたデータベースによ



- るマッチング（情報・環境・インターフェース，建築計画I）．学術講演梗概集，925-926.
- 25) 佐藤久夫（2005）．福祉・介護におけるICF活用の可能性．国立特殊教育総合研究所・世界保健機関（WHO）編著．ICF（国際生活機能分類）活用の試み—障害のある子どもの支援を中心に—，152-155．ジヤース教育新社．
- 26) 柴原君江（2008）．生活支援における活動・参加の課題と環境因子．田園調布学園大学紀要，（3），1-15．
- 27) 城正子（2011）．人間科学としての生活支援の知識体系を目ざした新教育課程領域「こころとからだのしくみ」の科目「（日常生活活動に関連した）こころとからだのしくみ」の教育内容の編成．浦和論叢（44），67-79．
- 28) 高木健志・土田耕司・岡京子（2005）．介護福祉理念に関する一考察：国際生活機能分類に基づいて．川崎医療短期大学紀要，25，35-39．
- 29) 田中浩二・高橋泰・大河内二郎（2005）．国際生活機能分類による環境因子測定の試み—サービス・制度・政策．国際医療福祉大学紀要，10（2），5-17．
- 30) 田中浩二・大河内二郎・高橋泰（2006）．国際生活機能分類（ICF）による高齢者の環境因子の評価について．病院管理，43（2），139-146．
- 31) 田中浩二（2009）．就学前の子どもの支援におけるICF-CY活用方策の提案．国立特別支援教育総合研究所「ICF児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究」研究成果報告書，131-134．
- 32) 田中浩二（2009）福祉分野におけるICF-CY活用への期待．国立特別支援教育総合研究所「ICF児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究」研究成果報告書，140-143．
- 33) 溪村真司（2008）．国際生活機能分類（ICF）がもたらしたものの：社会福祉援助技術の視点から．種智院大学研究紀要，9，1-29．
- 34) 植田章（2003）．ケアマネジメントの視点からみた支援費制度・障害者問題研究，30（4），284-294．
- 35) 牛山琴美・横田善夫・勝平純司・山本澄子・渡辺仁史（2003）．腰椎疾患を持つ人のための洗面台の高さの研究（機器・設備、建築計画I）．学術講演梗概集785-786．
- 36) 矢島卓郎（2007）．一心身障害児施設の病棟における生活音の実情と課題：生活音の音圧測定と職員アンケート結果による検討．目白大学総合科学研究，3，113-124．
- 37) 山崎百子（2006）．福祉サービスの質評価を目的としたニーズ抽出質問票作成の試み：ICFユニバーサルモデルの視点から．健康科学大学紀要，（2），159-172．
- 38) 山崎百子（2006）．ニーズを理解する福祉サービスとは？：心理学の応用 理解と介入（個体と環境の関係）．日本老年医学会雑誌，43（1），58-61．
- 39) 由田美津子・道下千春（2007）．介護技術講習会における介護過程教育方法の試み：ICFモデルの活用と事例記載シートの考案．北陸学院短期大学紀要，39，199-208．

#### ○保健分野に関するもの

- 1) 藤本末美・原政代・石川浩代・河原牧子・大端聡子・南安津美・妹尾幹子・南出幹子・金谷裕代・佐々木郁代・水田ハルコ（2006）．介護予防活動の検討．人間福祉研究，8，15-30．
- 2) 舟根妃都美・服部ユカリ（2005）．積雪寒冷地において雪・氷が原因で骨折した高齢者に関する研究．老年看護学，10（1），24-33．
- 3) 林隆・木戸久美子・小野善郎（2005）．知的障害児者入所施設保健医療担当者の問題行動への認識と薬剤適応について：ICFスケールを用いた問題行動についての認識調査．山口県立大学大学院論集 6，71-79．
- 4) 日下隆一・小森昌彦・田中康之・逢坂伸子・長野野・黒川直樹・藤本哲也（2008）．介護予防における理学療法士の視点：ICFコアセットを用いて．理学療法科学，23（1），29-33．
- 5) 奈倉道隆（2010）．高齢者のウェルネスを支援する医学カウンセリング．心身医学 50（3），187-194．
- 6) 縄井清志・仙波浩幸（2008）．医療・福祉領域の機械工学的課題についての調査．日本貴機械学会年次大会論文集 2008（7），271-272．
- 7) 西牧謙吾（2005）．保健分野におけるICF活用の可能性—ヘルスプロモーションとの関連において—．国立特殊教育総合研究所・世界保健機関（WHO）編著．ICF（国際生活機能分類）活用の試み—障害のある子どもの支援を中心に—，156-158．ジヤース教育新社．
- 8) 小木曾加奈子・山下科子・安藤恵美（2008）．介護老人保健施設における要介護1の高齢者の生活課題の傾向について—国際生活機能分類（ICF）の視点からの分析．老年看護，39，106-108．
- 9) 小木曾加奈子・山下科子・安藤恵美（2008）．介護老人保健施設における要介護5のケアプランの傾向について—国際生活機能分類の視点を用いて．日本看護

- 学会論文集, 看護教育, 39, 367-369.
- 10) 杉原努 (2004). 「精神保健福祉援助実習」自己評価表作成の目的と視点. 社会学部論集, 39, 115-131.
  - 11) 鈴木昭 (2003). 保健・医療・福祉の一体的推進: 県行政の立場から. 新潟医療福祉学会誌, 3 (1), 11-12.
  - 12) 徳江与志子・新井真由美・宗行彪・土屋信子 (2002). 広汎性発達障害児に対するチームアプローチ: 幼稚園訪問を通して. 群馬保健学紀要, 22, 71-77.
  - 13) 山下科子・小木曾加奈子・安藤恵美 (2008). 介護老人保健施設における認知症高齢者のケア内容の傾向について-国際生活機能分類 (ICF) の視点からの分析. 日本看護学会論文集, 老年看護, 39, 103-105.
  - 14) 吉川彰二・永井利三郎・小垣滋豊・福嶋教偉 (2008). フォンタン型手術後の子どもの「生活機能」の検討: 保護者へのインタビューより. 小児保健研究, 67 (2), 315-321.

#### ○労働分野に関するもの

- 1) 藤田早苗・菊池恵美子 (2005). ICF (国際生活機能分類) による復職後の生活困難に関する分析: 脳血管障害者9名を通して. 日本保健科学学会誌, 7 (4), 277-284.
- 2) 春名由一郎 (2009). 職業領域における活用. 総合リハビリテーション, 37 (3), 220-226.
- 3) 春名由一郎 (2007). 発達障害領域における国際生活機能分類ICFの活用: 職業面への活用. 発達障害研究, 29 (4), 235-244.
- 4) 春名由一郎 (2005). 職業リハビリテーションへのICFの活用. 国立特殊教育総合研究所・世界保健機関 (WHO) 編著. ICF (国際生活機能分類) 活用の試みー障害のある子どもの支援を中心にー, 156-158. ジアース教育新社.
- 5) 春名由一郎 (2009). 労働分野からみた就労への移行におけるICF-CY活用への期待. 国立特別支援教育総合研究所「ICF児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究」研究成果報告書, 144-148.
- 6) 今野義孝・霜田浩信 (2006). 知的障害者の就労支援に関する研究: S社の「チャレンジ雇用」. 人間科学研究 (28), 69-78.
- 7) 厚生労働省職業安定局 (2006). 「難病患者の雇用管理・就労支援に関する実態調査」調査結果.
- 8) 中村 Thomas 裕美・山田 孝・菊池恵美子 (2003).

- 復職を目指す地域通所事例に対する人間作業モデルの有効性. 東京保健科学学会誌, 6 (3), 238-246.
- 9) 野田泰弘 (2005). 職場実習事業の実践事例をICFの視点で検証する. 国立特殊教育総合研究所・世界保健機関 (WHO) 編著. ICF (国際生活機能分類) 活用の試みー障害のある子どもの支援を中心にー, 162-166. ジアース教育新社.
  - 10) 障害者職業総合センター (2005). 「職業的視点から見た障害と地域における効果的支援に関する総合的研究」調査研究報告書 No. 67.
  - 11) 障害者職業総合センター (2009). 地域就労支援における情報の取得と活用のガイドブック.
  - 12) 障害者職業総合センター (2011). 「障害者の自立支援と就業支援の効果的連携のための実証的研究」調査研究報告書No. 100.
  - 13) 障害者職業総合センター (2011). 「難病のある人の雇用管理の課題と雇用支援のあり方に関する研究」調査研究報告書No. 103.
  - 14) 山内寿恵・渡邊修 (2008). 作業遂行プロセスモデルを用いた就労支援87脳損傷事例における遂行機能障害, 機能障害, 活動制限, 参加制約, 環境因子の分析. 日本保健科学学会誌, 11 (4), 214-224.
  - 15) 安井秀作 (2006). 障害者自立支援法における雇用・就労システムの課題. 近畿福祉大学紀要, 7 (2), 199-214.

#### <引用文献>

- 発達障害学会 (2007). 特集: 発達障害領域における国際生活機能分類ICFの活用. 発達障害研究, 29 (4).
- 医学書院 (2009). 特集: 国際生活機能分類 (ICF) の現況と問題点. 総合リハビリテーション, 37 (3), 220-226.
- 伊藤尚志 (2007). ICFを活用した学校生活づくりと社会生活への移行の取り組みー自力通学を実現し, その後授産施設へ自力通勤しているHさんの3年間ー, 国立特別支援教育総合研究所編著. ICF及びICF-CYの活用 試みから実践へー特別支援教育を中心にー, 80-87. ジアース教育新社.
- 国立特殊教育総合研究所・世界保健機関 (WHO) (2005) 編著. ICF (国際生活機能分類) 活用の試みー障害のある子どもの支援を中心にー. ジアース教育新社.
- 国立特別支援教育総合研究所 (2008). 教育関連分野や外国でのICF及びICF-CY活用. 「ICF児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究」研究

- 成果報告書, 131-155.
- 厚生労働省大臣官房統計情報部編 (2007). 生活機能分類の活用に向けて—ICF (国際生活機能分類): 活動と参加の基準 (暫定案) —.
- 厚生統計協会 (2011). ICF (国際生活機能分類) 特集. 厚生指標, 58 (1).
- 松村勘由・加福千佳子・徳永亜希雄・小林幸子 (2010). 特別支援学校におけるICF及びICF-CYについての認知度・活用状況等に関する調査のまとめ (最終報告). 国立特別支援教育総合研究所Webサイト.
- 文部科学省 (2009). 特別支援学校小学部・中学部学習指導要領.
- 宮岸尚平・三浦友和・徳永亜希雄 (2009). ICF-CYを活用した教育相談の取り組み—読み書きに困難のある児童への事例を中心に—. 国立特別支援教育総合研究所教育相談年報第30号, 23-31.
- 文部科学省 (2009). 特別支援学校小学部・中学部学習指導要領解説 総則編.
- 文部科学省 (2009). 特別支援学校小学部・中学部学習指導要領解説 自立活動編.
- 文部科学省初等教育局長 (2007). 特別支援教育の推進について (通知) (19文科初第125号).
- 大川弥生 (2006). ICF (国際生活機能分類) —「生きることの全体像」についての「共通言語」—. 第1回社会保障審議会統計分科会生活機能分類専門委員会資料.
- 佐藤久夫 (2005). ICF活用の重要性. 国立特殊教育総合研究所・世界保健機関 (WHO) 編著. ICF (国際生活機能分類) 活用の試み—障害のある子どもの支援を中心に—, 6-10. ジアース教育新社.
- 世界保健機関 (WHO)・障害者福祉研究会 (2002). 国際生活機能分類—国際障害分類改定版—中央法規.
- 世界保健機関 (WHO)・厚生労働省統計情報部 (2008). ICF-CY 国際生活機能分類—児童版—, 中央法規.
- 田中浩二・大河内二郎・高橋泰 (2006). 国際生活機能分類 (ICF) による高齢者の環境因子の評価について. 病院管理, 43 (2), 139-146.
- 徳永亜希雄 (2007). ICFの教育への活用—ICF-CYの動向も踏まえつつ—. 発達障害研究, 29 (4), 218-227.
- 徳永亜希雄・松村勘由・加福千佳子・小林幸子 (2010). 「ICF 関連図」の活用について. 国立特別支援教育総合研究所「特別支援教育におけるICF-CYの活用に関する実際研究」研究成果報告書, 59-64.
- 上田敏 (2005). 国際生活機能分類ICFの理解と活用—人が「生きること」「生きることの困難 (障害)」をどうとらえるか—. きょうされん.
- 内山靖 (2009). 世界におけるICFの取り組み. PTジャーナル, 43 (8), 653-660.

# Study of ICF/ICF-CY use in the fields related to Special Needs Education for multidisciplinary approaches

TOKUNAGA Akio\*, TANAKA Koji\*\*, SAKAI Yutaka\*\*\*,  
HARUNA Yuichiro \*\*\*\*, and SATO Hisao\*\*\*\*\*

(\*Department of Educational Support) (\*\*Tokyo Seitoku College) (\*\*Teikyo University)

(\*\*\*\*The National Institute of Vocational Rehabilitation) (\*\*\*\*\*Japan College of Social Work)

Characteristics of using ICF/ICF-CY in medical, welfare, health and labor fields related to special needs education in Japan was investigated, and compared to the use of special schools, toward contribution to multidisciplinary approaches using ICF/ICF-CY. Published articles (n=112) were analyzed from the perspective of previous research and compared with survey data of special schools. Results indicated that the articles commonly referred to conceptual frameworks and components. The main difference between the articles was that items and statistics were described in labor related fields, more often

than in other fields. Compared to use in special schools, it was indicated that more importance was attached to the use of concepts. Moreover, in related fields, items were mentioned more frequently and evaluations were conducted more often. It was indicated that using conceptual frameworks for comprehending cases was effective and that knowledge about items is necessary for multidisciplinary approaches using ICF/ICF-CY.

**Key Words:** Special Needs Education, Related field, ICF, ICF-CY, Multidisciplinary Approach